

彷徨える総統。アメリカ  
カを行く。

イブ\_ib

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ヒトラー 荒廃したアメリカで目覚める。

さあ、祖国ドイツに帰るのだ！

どうやって・・・？

# 目次

|            |    |
|------------|----|
| ヒトラー 復活する。 | 1  |
| 相棒         | 13 |
| アバナシーファーム  | 18 |



# ヒトラー 復活する。

1945年4月29日

ヒトラーは妻のエヴァと一緒に柔らかなソファに座っていた。ソファに座ってヒトラーたちは？気にも、しばし国務を忘れようと決めていたのだ。

そしてヒトラーはエヴァとしばし談笑した後、手持ちの古いピストルを見せた。

...

2287年8月30日

2077年に起きた最終核戦争によって、アメリカが国家の要諦を失つてすでに20年と10年ちよつとが過ぎていた。

そんな混沌と暴力が支配するかつての自由の国で、ある男が目覚める。



四月にしてはいささか暖かい気温に私は目を覚ます。

空は青く、敵機は見えない。

砲音も聞こえない。

そう思いながら私は周りを見渡す。

するとどうだろう！

私の目前には崩壊寸前の廃屋が建っていた。

その隣の家も、その奥も、全てが倒壊寸前。窓が割れて扉もドアノブがぶつ壊れて開きっぱなしである。

「けしからん、確かに物的価値のあるものは破壊しろと言ったが、こう中途半端では困る！」

ここまで壊すのならば、火を放って徹底的に燃やすべきだ！

もし敵の手にあの廃屋が渡ったらどうする？

雨風が凌げるではないか！

身を隠し待ち伏せされるではないか！

ドアもあのままでは敵は好きのようにドアから入って出て行くだけだ！

だからネジの一本に至るまで徹底的に破壊しろと命令したのだ。

と、一通り怒った後、私はとんでもないことに気付く。

建物がこうして破壊されている以上、戦闘が続いているはずだ、なのに何故総統である私が地上にいるのか?!

早く総統地下壕に戻らなくては!

というか私をこんな地上に放り出したのは誰なんだ!

「デーニッツ！ゲッベルス！ボルマン！いないのかー!」

地下壕の入り口を探しながら部下の名前を叫ぶ。

が、いくら叫んでも返事は来ないし、周りを見渡しても入り口らしい物は見つからない。それどころか冷静になって周りの景色を見ると、どうやらベルリンではない気がしてきた。

「まさか、私はついさつきまでベルリンにいたんだぞ、いきなり別の場所に行くものかー!」

そう言いながら付近を歩き、ここがベルリンだという証拠を探す。

すると目の前に一際目立つ看板が見える。

露出度の高い女性が電球のガラス部分の様なものを被っており、隣に黒い飲料水と思われる物が描いてある。

ヌカコーラ？

そんな事どうでも良い。こんな戦時下でこの様な広告を出して良いと許可した覚えは無い。

こんな看板に使われるブリキやペンキにも国民の貴重な財産が使われていると思うと腹が立つ。

宣伝省の怠慢である。一体何をしているのか！

その隣のポスターに目を移すと・・・

なんとという事であろうか！ここはドイツでは無いのか？！

そのポスターには、敵国アメリカの国旗をモチーフとしたスーツ、自己主張の激しい男のアンクルサムが倒れている所を、厳つい鎧を着た兵士が手を取っているポスターだ。

アンクルサムは手を差し伸べている鎧男ではなく、こちらを見ている。

ええい、こつちをみるんじや無い！気色悪い！



そしてその下には、「国は君の手を欲している！」だとか何とか英語で書いてある。

しかしこれは一体どういう事だ!?

何故我がドイツにこの様なポスターが!?

私の優秀なる頭脳は、ある一つの仮定に辿り着く。

「ドイツは既に降伏し、私は眠っている間にアメリカに引き渡された。」

いや、それは無い。仮に引き渡されたとして、何故あんな荒地に放置する?

ではどうか?

「連合国の特殊部隊が私を拉致し、特殊な環境に置き、何か情報を吐き出さないか調査をしている」

それも信憑性に欠ける。

嚴重に警備された總統地下壕に侵入するなど出来るわけがない。

しかしその様な可能性も完全に無いとは言えない。如何なる事態でも臨機応変に対応出来てこそ民族の指導者が務まると言うものだ。

もし満足のいく結果が得られなかったとしてアメリカ兵が私を殺しに来たとしても

タダでは死ぬまい。

たしかピストルが有ったはずだ。

そう言いながら腰ベルトからワルサー P P K を取り出して弾を確認する。

武器は問題ない、さてどうするか。

兎に角今やるべき事は、このアメリカの地から脱出し、ドイツへと目指す事。

私がいなくなりさぞ地下壕は混乱しているだろう、早く戻って指揮をとらねば。

.....

.....

どうやってアメリカからでればいいんだ？

飛行機や船などの手段はあるが、飛行機は操縦出来ないし、船は1人では動かせない。

そもそもイギリスがいる以上、大西洋は米英の独壇場になっている筈だ。

.....

「如何なる逆境でも乗り越えて初めて真の勝利を手にする事が出来る！ドイツ民族に出来ない事は無いのだ！」

ヒトラーは自らを奮い立たせて、目の前の道を歩いていくのであった。



コンコード

何時間歩いただろうか、やつと街と言える様な場所に着いた。

行く道中空を飛んでいたのは鳥のみだし、銃声も聞こえて来ない。

街は戦火にあつた様に荒れ放題であるにも関わらずだ。

ここなら誰かがいるだろう。

もしかしたら総統が拉致された事に怒り心頭となつた我が軍の精銳がアメリカ本土に攻撃を仕掛けており、既に我がドイツの占領地となつている可能性も捨て切れない。

シユタイナーは命令を聞けぬへボでダメでカスだったが、私は全てを絶望した訳では無いのだ。



「まったく、今日はツいてねえなあ」

「ヌカコーラも無し、ソールズベリーステーキもないと来た。」

街の中でも一際目立つ建物の前で、2人の男が、焚き火を囲つて話をしている。

物陰から彼等を見たが確信する、彼等はドイツ兵ではないと。

彼等の服は破れ、体毛は伸び放題で薄汚れており、品の無い野蠻人の様に見える。

どうする？話しかけるか？いや、どうも話しかけても碌な事にならない気がする。

それならば、残念だがこの街は通り過ぎる事にするか……。  
私は目立たぬ様に、街を迂回する事にした。

「おい、なんか臭わねえか？」

「……ホントだ、ガソリン臭え」

一瞬何のことかと思つたが、成る程今着ている服から強烈なガソリンの臭いがする。そうか、これはベンジンだ。きつとエヴァが制服の汚れを落とそうとして、躍起になつてひと瓶丸ごとかけたのだろう。

……ヤバイ！

ベンジンはガソリンの様なものだ、それが引火でもしたらたちまち総統の丸焼きが出る上がる、冗談ではない！。

「誰だ!!」

「クソボケが！」

p a f f ! p a f f ! p a f f !

「ワッ!!!」

男2人組は、私のいる方向に向けて撃ち始めるが命中精度は悪いようで、デタラメな方向に飛んでいく。

撃たれっぱなしでは寝覚めが悪いので、私もワルサーPPKで反撃に移る事にする。

P a f f !!

レイダーの銃はただの鉄パイプ同然の銃に対し、此方はキチンと精巧に作られたドイツ製だ。

弾は真つ直ぐに暴漢の頭に向かい、命中する。

「グアッ!!」

一度倒れるも、男は注射器を使うとすぐに立ち上がる。

「ふざけるな!五臓六腑満遍なくバラバラにしてやる!」

怒り狂った様子で男どもは追いかけて来る。

「化け物か!?!」

私は分が悪いと判断して、逃げる事に専念する事にした。国の指導者たるもの引き際

を見誤ってはいけないのだ。



「はあ……はあ……」

どうやら暴漢共を巻く事が出来たようだ。

どうやら此処は住宅街の様だが、やはり此処も荒廃している。

「とにかく、何処か休める場所は無いのか……」

何故総統の私がこの様な目に会わなければならないのか。

その様に考えている時であつた。

「……」

その時の私の様子を見たら、誰もが笑っていただろう。

口をあぐりと開け、目を見開き、両腕をダランと下げていたのだから。

目の前の家には、なんと錆びついた謎の球体の機械らしきものが浮いていたのだ。しかも鼻歌の様なものを歌って植木の手入れをしていると来た。

「……あ、ああ？あ!？」

銀色玉は余りの驚きにこの様な声しか出ない私に気付いた様で、触覚の様な気味の悪い3つのレンズが私を捕える。

「おや？そこにおられるのはだれですか？」

そう言いながら銀玉は此方に向かって飛んでくる。

「ひい！ひいひいひい!!」

恐らく人生で最も情けない声をあげたのは、前にも後にもこの時だけだろう。

◆◆◆◆◆

私は友好的に話しかけて来たこのコズワースとかいうロボットに可能性を賭けて見ることにした。

「貴方のお話を纏めるに、貴方は約250年の時を得てベルリンからこのサンクチュアリに辿りついたということですか！ハハー！此れは傑作です！」

先程この球から2077年から2000年経つたと聞かされたが、そもそも1945年から132年も経っているので、100年2000年経つてようが、そこはもうどうでもいい話なのであった。

「ところでコズワース、これからは私の事は貴方ではなく総統と呼んでもらいたい。」  
ポーズもな、といい右手を高くあげてナチス式敬礼を取る。

「おやおや、此処まで徹底するとはかなりの凝り性の様です。わかりましたそう呼びましよう。総統閣下」

コズワースは火炎放射器がある腕をピシッと上へ上げながら言った。

その様子を私は見て満足げに頷きながら、いつか必ずドイツに戻って見せると決意を露わにして、星が現れ始めた空を見上げたのであった。



## 相棒

朝になった。

朝になれば起き、仕事に勤しむ。

それは総統になろうと、世界が変わろうと変わる事はない。

「おや、総統閣下起きましたか」

ベッドは既にガラクタと成り果てており。ボロ切れとなった布で寝ていたが、案外寝れるものだ。

「おはようコズワース。しかし、こんなに静かな朝もいつぶりだろうか」

思えば、防空壕の中はいつも騒がしかった。人の声は勿論、忌々しい赤軍の砲撃で、ゆつくり休む暇も無かったのだ。

「総統閣下、朝ごはんでもどうぞぞ。

200年経つてるでしょうが、大丈夫でしょう」

そう言うと、コズワースは飲料水とシリアルを持ってきた。

「これがアメリカの食べ物か．．．うっ?!」

何だこれは！胸焼けする程甘いぞ！

私は思わず怒鳴ってしまおう。

「コズワース!!!何だこれは!」

「それはシユガーボムです。1日分の糖分摂取量の100%をそれでまかなえます!」  
道理で甘いはずだ。

食欲を無くした私は水を飲み終わると、付近の搜索をする事にした。



「しかし、酷い荒れ具合だ」

至る所の植物が枯れ果てている。

錆びだらけとなった車の中を興味深く覗いていると、何やら羽音が聞こえて来た。

「おや、何の音だ?」

振り向くと、そこに居たのはどでかいハエであった。

なんて事だ!アメリカは遺伝子を弄りこんな生物兵器を作ったと言うのか?!

直ぐ様銃を向け撃つ。が化物らしく大したダメージは与えられていない。

「総統閣下、危ない!!」

そう叫びながらコズワースが飛んで来て、その手の電動ノコで巨大バエを真っ二つに切り捨てた。

「な、なんだこいつは?!」

「ハエです。恐らく卑劣なレッドメナスが作った生物兵器でしょう。」

「レッドメナスだと？何だそれは」

「レッドメナスとは共産主義者の事です」

「なんだと?!ソビエトはまだ存在しているのか?!」

「はい、ソビエトです。中国です。あの卑劣なチャイニーズです。」

「くそ、卑劣なコミュニストめが・・・」

祖国に舞い戻ったら必ず滅ぼしてくれるわ・・・」

しかもチャイニーズとか言ったな、もしや中国の内戦は共産党が勝ったのか？

我々は国民党を支援していたからな、悔しい。



そんな感じで散策をしていると、とある一軒家の裏側に鉄扉があるのを見つけた。

「おや、なんだこれは？」

取手を引くと、最も簡単に開いたので警戒しながら降りてみた。

中は簡単な防空壕の様になっており、既に電気がついてる。

ポロポロになったベットや棚があり、下には開けられた空き缶がそこらに転がっている。

「ここに最近まで人がいたのか……? ……?!」

何かを見つけたヒトラーは、驚いた様にベットの足元にある小銃を手を取った。

「何故お前がここに居るのだ?!」

それはGew98であった。

ヒトラーが第一次世界大戦時、昼夜を共にした相棒であり、信頼できる戦友がまさか300年以上経ったこのアメリカの地で再び会えるとは思ってもいなかったのだ。

「これも何かの縁に違い無い。」

ヒトラーは抱きしめるようにGew98と弾を持ち帰った。



「総統閣下、お帰りなさいませ。」

「おや、その銃は……?」

「私の戦友だ。」

「そうでしたか」

「所でコズワース、ここら辺に他に人はいないのか?」

「前にコンコードに行った時は手荒い歓迎を受けましたからね、あまりお勧めは致しません。」

「そうか、あの街のことか」

先日の出来事にヒトラーは渋い顔をする。

「まあいい、まだ日も高い。少しだけ外を見てくる。」

「総統閣下、お気をつけ下さい。共産主義者が辺りにいるかもしれません。」

「大丈夫だ。」

ヒトラーはGew 98を掲げながら橋を渡って行った。



## アバナシーファーム

橋を越えた先に見えたのはV2が飾つてある奇妙なガソリンスタンドであった。

「奇妙なガソリンスタンドだ、ゆがんだ建物は退廃的ですらある…むッ！」

私は何やらガソリンスタンドの真ん中で動く動物を見つけ、そして自分の目を疑つた。

（やー！ やー！ やー！ なんということだ!!なぜ彼女がここに!!）

「ブロンディ！」

そこにいたのは私が溺愛していたブロンディに瓜二つのジャーマン・シェパードがいたのだ。

「い、いやよく考えれば彼女の筈がない…しかし何かの運命なのだろうか」

ブツブツ呟いている私を見て不思議に思つたのだろう、彼は此方に尻尾を振りながら近寄つてきた。

「おお…お前はもしかしてブロンディの子孫だというのか？ わざわざ私に会うためにアメリカまで来てくれたのか？」

私はブロンディを思い出し優しくなでた。すると彼はこっちだといわんばかりに野

山の方に駆ける。

「おいおい待ちなさい！」

◆◆◆

アバナシーファームの大黒柱であるブレイク・アバナシーはクララベルの世話をしていた。

するとサンクチュアリ（確かロボットが一体だけいた廃墟群）の方から一匹の犬がやって来た。

「wuff! wuff!」

「ん？何の用だ？レイダーの犬じゃあなさそうだが。飼ってやれないぞメイジーがいるからな」

と言いながら相手をしていると一人の男性が現れた。

多少よれているができる限り奇麗に着ようと努力をした後が見られるスーツに妙に整った頭髪、そして小綺麗なライフルにピストルと、おおよそレイダーの類ではなさそうな50代あたりと思われる男は妙に安心した顔で話しかけてきた。

「おお、（こ）は…農場かね」

「如何にもそうですが、連邦でこんな格好をしてるとは珍しい、旦那はアバナシーファームに取引か何か用で？」

「いや、そのの彼に案内されたのだ、君の犬ではないのかね？」

「いえ…コイツの事は初めてですが」

煮え切らない返事をしてしていると、娘のメアリーが出て来た。

「お父さん、お客さん？立ち話もなんですから中へどうぞ」



「なるほど、旦那は連邦に来て日が浅いんですか。」

「まあそういうことになる、先日野蛮人に襲われたのだがああいう輩はよくいるのか？」

「レイダーですか、あいつらはどこにでも湧きます。この前もここにやって来て農産物をかっさらっていかれましたよ」

なるほど実にけしからん、アメリカが崩壊して200年も経とうというのに未だ再建されないのは所詮アメリカ国民の愛国心が略奪等の欲に劣っているに他ならないからだろう。

ドイツ民族ならば国家が瓦解しようとも我々の志を継ぐ者により翌日には新たなドイツが芽吹いていることだろう。

「しかしいいのかね？こんな貫つてしまつて」

帰り際、私は一家から野菜を買った、しかも沢山だ。この様な人ばかりなら統制の取れた国家の再建など直ぐであろうに。



「構いませんサンクチュアリに住んでいるようですし、度々来てくださいよ」

「今度来た時、ヨーロッパの話をもっと聞かせて頂戴」

「ああ、いいとも聴かせて上げるさ、楽しみにしてくれ」

私は上機嫌で岐路に着いた、これまでの苦労を忘れさせてくれるよき時間であった。ちなみにジャーマン・シエパードはWolfとなずけた。ブロンディの産んだ子供と同じ名だ。

家は申し訳程度だが穴を板切れで塞ぎ、使える家財道具を運んだ。Wolfssch  
anze (狼の砦) にはしては心もとないが。

コズワースが野菜の調理をしている傍らでヴォルフに構っていた。

「ヴォルフ、オオカミを意味する名だ。私の名前のアドルフもオオカミを意味するんだ、オオカミ仲間だ」

「…その楽しげな様子、まるで旦那様と奥様とシヨン坊ちゃんを思い出します。」

「ほう昔のご主人か」

「ええ総統閣下、旦那様達は200年前の核戦争でVaultに行ってしまった。既に生きてはいないでしょう」

「…行ってみるか？ Vaultとやらの防空壕に。ご主人がどのように家族と過ごしたか分かるかもしれない。辛いだろうが過去との決別は大事だ」

「…そうですね、お供させていただきます」

「その前にアバナシーファームにも寄りたい。いいかな？」

「ええ！ええ！是非！喜んでお供しましょう！**総統閣下！**」